町民文芸

只見短歌会　令和四年十二月詠草

きれぎれの命であれどこの冬も施設で過ごす荷づくり急ぐ　馬場　八智

我が脇を黙して通り老人は葵の花よりしばし離れず　目黒　富子

車中より眺む伊南川只見川昔馴染みし思い出深む　関谷登美子

誰よりも早く起きたる乳幼児朝の陽よりも笑顔明るし　立花　奏音

老い母はショートステイの前日に朝から時かけ支度を済ます　新国由紀子

啄木の歌集読みゐし若き日の「じっと手を見る」を今に重ぬる　渡部ヨリ子

書を読めと昌子の歌集少女期より吾に給ひし師の叔父は亡し　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十二月定例会　日高俊平太　指導

前日の新聞読むや暮の秋
味噌蔵の味噌調えてそぞろ寒　都

ど忘れをマスクのせいに友の顔
風邪の子になめさせてみる寒の飴　一穂

老夫婦坐せる日向に糸とんぼ
友待ちて梨を剥くなり雨模様　真理子

傾いてなお天突くや冬立木
腰痛を忘れておりし大根引き　修一

人生の半分過ごすは雪の中
鯛焼を「おみやげです」と娘婿　睦子

コロナ禍を恐れぬ人や古都の秋
前へひたすら前へラガーの湯気　信

初時雨両手でつつむ朝茶碗
柿落葉橙色の籠を編む　紺青

北吹くや太き杉間に翁の碑
数え日のひと日は妻を歯科医まで　恒夫

冬うらら菜屑積まるる畑の隅
冬雲や森つき抜けて無線塔　礼